

り2007年6月より休業し経過観察の方針とした。休業より5ヶ月経過した2007年11月に施行したCTでは、腹水が完全に消失していることが確認されCR症例と診断した。2008年4月現在、本人の希望により化学療法を再開していないが、依然としてCR状態は保たれ、末梢神経障害はGrade 2まで改善し、引き続き外来にて経過観察中である。

虫垂粘液嚢胞腺癌に対する化学療法の有効性についての報告例は少なく、自験例は新たな治療法の可能性を示唆する症例であり、若干の文献的考察を加え報告する。

2 直腸脱に対してCircular staplerを用いた経肛門的S状結腸直腸切除術の経験

桑原 明史・須田 武保・坂田 純
日本歯科大学医科病院外科

【はじめに】高齢者の完全直腸脱に対して、Circular staplerを用いた経肛門的S状結腸直腸切除術を3例経験したので報告する。

〔症例1〕85歳、女性。6cmの完全直腸脱に対し、手術を施行(切除腸管は、10.5cm)した。術後経過は良好で、7病日に退院となった。術後3年再発は認めず(他病死)。

〔症例2〕81歳、女性。5cmの直腸脱に対し、手術を施行(切除腸管は9cm)した。術後経過は良好で7病日に退院した。術後4ヶ月目頃から直腸脱の再発(10cmの脱出)が出現し、Gant-Miwa-Thiersch法を施行し、術後3病日に退院した。

〔症例3〕88歳、女性。6cmの直腸脱に対して手術を施行(切除腸管は11.5cm)した。術後経過は良好で術後8病日に退院した。再発は無し。

【まとめ】本術式は侵襲が少なく、安全に施行できる。ただし、再発例を認めており、適応についてはさらなる検討を要すると考えられた。

3 Sessile serrated adenoma (SSA) の臨床的意義 — 内視鏡的摘除大腸早期癌の検討からみて —

岡 宏充・味岡 洋一・西倉 健
渡邊 玄・加藤 卓
新潟大学医歯学総合研究科第一病理学

【目的】近年前癌病変として注目されているsessile serrated adenoma (SSA) を併存する早期大腸癌の頻度を検討し、SSAの臨床的意義を明らかにすることを目的とした。

【材料および方法】内視鏡的摘除されたM癌726例と粘膜内部残存SM1癌56例の計782例を対象とし、癌に併存する病変を過形成性ポリープ(HP)、SSA、鋸歯状腺腫(TSA)、管状・管状絨毛・絨毛腺腫(AD)に分け、それぞれの頻度と臨床病理学的特徴を比較した。

【結果】782例中ADまたはTSA併存例が730病変(93%)、SSA併存例が13病変(1.7%)、HP併存例が1例(0.55%)、併存病変のない純粹癌が38病変(4.9%)であった。各併存病変別で年齢、最大径、男女比に有意差はなかったが、SSA併存癌は右側結腸に好発する傾向がみられ、右側結腸癌においてはSSA併存例が4.2%を占めていた。

【結論】SSAを介した癌化経路は存在するが、その頻度は極めて低くSSAの大腸癌発生母地としての臨床的意義は低い。しかし、右側大腸癌に限るとその5%弱がSSAを発生母地としている可能性があり、右側大腸のSSAの臨床的取扱いには注意を要すると考えられた。

II. 主 題

1 レミケード投与間隔について考えさせられたクローン病2例

田中由佳里・本間 照・早川 雅人
夏井 正明・姉崎 一弥・松澤 純
杉山 幹也・渡邊 雅史

県立新発田病院内科

〔症例1〕14歳、女性。腹痛、下痢が1年前より

出現し、口腔内アフタ、結節性紅斑を生じた為、精査にて Crohn 病と診断された。小児のため栄養療法の維持は困難で IFX を導入した。初期投与 3 回で症状消失、投与間隔を延長した所、肛門周囲膿瘍を発症、切開排膿後症状は消失した。現在 IFX の投与間隔を 8 週とし、寛解維持中である。

〔症例 2〕45 歳、男性。平成 2 年腹痛を自覚し Crohn 病と診断された。SASP アレルギーがあり MNZ で治療され、症状は安定していた。平成 19 年春から粘血便が出現し、12 月 IFX 導入となった。導入後 2 週間で発熱が出現し合併症の有無ないし IFX の有効性判定に苦慮した。その後も IFX 有効期間は 2 週程度の為 6MP, totalED を併用し 4 週毎に IFX を投与中である。

【考察】経過良好な患者に 8 週間隔の継続投与をいつまで続けるべきか、また有効期間が短い症例にどういった工夫が必要か考えさせられた症例であった。

2 当科の Crohn 病に対する手術の検討

飯合 恒夫・野上 仁・岩谷 昭
伏木 麻恵・岡村 卓磨・亀山 仁史
須田 和敬・丸山 聡・谷 達夫
島山 勝義
新潟大学医歯学総合研究科消化器・
一般外科学分野

【背景と目的】当科における Crohn 病手術の現状を明らかにする。

【対象】1982 年より 2007 年まで、当科で手術を行った Crohn 病患者 52 名、のべ 65 回の手術（肛門病変に対する切開排膿は除外した）。男：女＝38：14。平均年齢 32（17-56）歳。

【結果】1990 年後期より手術件数は増加していた。手術適応は狭窄 31 例、瘻孔・膿瘍 26 例であったが、発癌も 1 例に認めた。病型は、小腸型 19 例、小腸大腸型 24 例、大腸型 9 例であった。術式は、回腸または回盲部切除が 35 例と最も多かった。最近大腸切除も増えており、大腸全全摘術も 3 例に行なわれていた。術前治療は、栄養療法や 5-ASA を中心とした薬物療法が約 70% に行わ

れていたが、免疫調節剤や抗 TNF- α 抗体を使用されていたものはなかった。一方、術後療法として、栄養療法や 5-ASA を中心とした薬物療法が約 80% に施行されていたほか、近年は、免疫調節剤、抗 TNF- α 抗体の使用例も増加していた。累積再手術率は、5 年 37.8%、10 年 48.2% であった。

【結語】Crohn 病においては、切除法や吻合法を含めた手術法以外、術後栄養療法と薬物療法の継続が重要であると考えられたが、その中でも今後は術後の免疫調節剤、抗 TNF- α 抗体の使用法の確立が必要になってくる。

3 Crohn 病術後症例に対する免疫調節剤の再発予防効果の検討

横山 純二・河内 裕介・鈴木 健司
小林 正明・佐藤 祐一・竹内 学
塩路 和彦・青柳 豊・成澤林太郎*
飯合 恒夫**・島山 勝義**
杉村 一仁***

新潟大学医歯学総合研究科消化器
内科学分野
新潟大学医歯学総合病院光学医療
診療部*
新潟大学医歯学総合研究科消化器・
一般外科学分野**
新潟市民病院消化器科***

【目的】Crohn 病術後症例に対する免疫調節剤（6-MP/AZA）の再発予防効果を検討する。

【対象】当院における術後 Crohn 病患者のうち、術後より免疫調節剤の使用を開始した 6 症例を対象とした。

【方法】術後平均観察期間は 21.8 ヶ月（14～29 ヶ月）。臨床症状、血中 CRP、吻合部および吻合部周囲の内視鏡所見（Rutgeerts' endoscopic score: 0～4）の変化について評価を行った。

【結果】観察期間中 6 例中 4 例で、入院治療を要した。1 例は腸閉塞で、内視鏡的バルーン拡張術を施行。3 例は、下痢、体重減少で、吻合部中心に score 3 の再発を認めたため、インフリキシマブの投与を開始した。残り 2 例も内視鏡的にはそ